



さくぶんぶもんにゅうしょうさくひん
作文部門入賞作品

ないかくそうりだいじんしょう
内閣総理大臣賞



こめづくう
米作りを受けつぎたい

とちぎけんはがちょうりつはがみなみ
栃木県芳賀町立芳賀南小学校6年 荒井 俊紀

ぼくの家には田んぼがあり、毎年米作りをしています。米作りの中心人物は、八十二さいになるぼくのおばあちゃんです。おばあちゃんは米作りを始めて六十年にもなるベテランです。ぼくの父も小さいころから手伝い、今は機械を運転し田植えから稲かりまで行っています。

ぼくは、五さいのころから作業をしているおばあちゃんや父のまわりでうろちよろして遊んだり、長ぐつをはいて田んぼについていました。三年生になったぐらいから苗作りの手伝いをするようになりました。初めて教えてもらった作業は、種もみをパレットに入れることでした。種もみを入れるための機械にパレットを通す作業は、タイミングが難しいため、汗をばたばた落しながら次から次へとパレットを通していききました。作業を終えたとき、おばあちゃんが、

「俊紀くんが手伝ってくれて助かったよ。」
と言つてほめてくれました。

ぼくの家の米作りは、おばあちゃんから父に受けつがれます。そしてぼくがもう少し大きくなったら、父と一緒に米作りをしたいと思っています。そうやって田んぼを受けつぎたいです。

それから、ぼくにはもう一つの夢があります。

それは、農業のことをこれからたくさん勉強して、色々な研究や調査をすることです。そう思うきっかけとなったのは、五年生の総合の授業でお米のことを習ったからです。お米については今までおばあちゃんや父から聞いた話でいたい知っているつもりでした。でも実は知らないことだらけでした。

学校での学習でぼくが一番おどろいたことは、お米の生産量と消費量の变化です。一九七〇年ごろから生産量が消費量を上まわるようになり、お米があまるようになりました。日本の食生活が昔と比べて大きく変わり、お米にかわつてパンやめんなどを多く食べるようになったからです。ぼくの家では朝ご飯もほとんどご飯とみそ汁なので、そのような話はとてもさびしい気がします。

また、農業をやめてしまう人が増えていることや、引きつぐ若い人が減っていることも知りました。今では少しでも農業をさかんにしたり、お米の消費量を増やすためにいろいろな活動が行われているそうです。

そこで、ぼくにも何かできることがないかと考えているうちに、お米に関わる仕事をしたいと思うようになったのです。そのためには、もっと米作りについて知らなければいけないし、農業についてくわしく勉強しなければなりません。

まだ具体的には分かりませんが、勉強をしてみつけた仕事をしながら、家の田んぼを受けつぎ守っていききたい。それがぼくの夢なのです。